

## 比較史学史の可能性について

石井規衛

歴史叙述、歴史意識、歴史学を、周囲の政治的、時代的狀況と関係づけて論じた三報告のコメントーターに私が指名された理由は、報告者の扱う地域がフィンランド、日本、オスマンと、いずれもロシア帝国と接していた地域だったからだ、はなから信じ続けている。とはいっても、申し出を受けた私自身、歴史知(学)の史的な検討に関心があったのも事実である。

一〇年以上も前に、前任校で「史学概論」という半期だけの授業を三年間続けたことがあった。この「史学概論」という講義は、西洋史、日本史、東洋史、考古学、美術史を専修しようとする学生全員にとって必修の科目であり、その単位をとらなければ一時的に文学部に進学できたとしても卒業はできない。そのような講義の担当を、理由は定

かでないが「西洋史学研究室」のスタッフが担うことが慣例となっていた。問題関心も多様な学生を相手に自分の専門を中心に話をするわけにはいかない。かといって、大風呂敷を広げた話も、無責任だろう。思案の末、専門のロシア近・現代史を踏まえながらも、日本の近代史学史を講義することにしたのである。

そのように決定した背景には、まず、明治維新で形成され明治憲法体制下の近代日本の歩みと、ロシア革命を端とするソヴィエト期ロシアの歩みとは、かなりの共通面が見られる、という認識があった。明治維新は、ひろく言うて「革命」とみなせるが、その時期から一九四五年までの七七年間、ダイナミックに展開し、良くも悪くも国の内外に大きな衝撃を与え、そして劇的に崩壊した。ロシアも同

じく、一九一七年のボリシェヴィキの武装蜂起（十月革命）から一九九一年に劇的に解体するまでの七四年間、ダイナミックに展開し、同じく良くも悪くも内外に巨大な衝撃を与えてきたのだった。革命国家であった点や、開発独裁の性格を帯び、拡張主義的振る舞いの傾向を強くもつていた点でも、明治憲法下の日本とソヴィエト期ロシアの歴史的な歩みはパラレルであった。

この二つの革命国家は、歴史を新国家の正統化や、国民の統合と動員的手段として用い、それに対応する特徴的な歴史神話を創造した。「長い一九世紀」における国家（必ずしも国民国家と呼ぶ必要もないのだが）形成には、しばしば相応するスタイルの新しい歴史知の形成が伴走したもののだが、ダイナミックな新興の革命国家にあつては、ときに「歴史学」は、その国家に「奉公・奉仕」する装置の一つとなった。しかしながら、神話を手段として現実社会に作用するさいに、諸処にほころびが自ずと生まれ、現実にとつた歴史知との間で、多様で、さまざまな程度の摩擦や緊張を引き起こすことになる。こうした点でも、明治国家やソヴィエト期ロシアは共通している。

現代の歴史学とは、そうした「歴史学」が置かれた時代を経験し、その痛苦に満ちた体験の真剣な反省にたつたものである。両国の独特な状況に置かれた歴史知を比較する

ことは、それ自体興味深いことだが、それだけではない。現在の歴史研究を見直し、そもそも過去や現代の現実社会における、そして未来における歴史学の位置を見定めるための一助にもなり、結局のところ、「史」を志す学生にとつて有意義な独自のテーマであると思えたのである。なお、「ソヴィエト歴史学」ほどまでに国家の動きと緊密に連動し、一体化すると、それ自身が当該国家の隠れた動向を読み解くための格好の資料にもなりうるといふ点を、言い添えておく。

千葉報告「歴史と政治―南北朝正閏問題を中心として」は、近年、関心が高まっている「戦前期の歴史学の展開における画期となった南北朝正閏問題」を、政治史の文脈に位置づけ、未公刊史料も用いて正統的なスタイルで論じた堅実な報告である。

なによりも興味深かったのは、明治革命国家が帯びるダブルスタンダードであり、それに対応した明治革命国家のもとでの歴史学の独特な性格である。「大日本帝国憲法」は、明治維新革命を具現した中軸的な制度となり、いまや新国家の正統性を導き出す新しい源泉となったのだった。その第一条の規定に明記された天皇の「万世一系」という捉え方は、明治革命の推進勢力の有力な在野思想たる水戸

学が主に唱えていた。水戸学は、南朝正統派論者でもあった。ところが明治天皇は北朝の出であり、宮中では北朝の歴代天皇も祀っていた。両者の狭間で国家指導者たちは、南北正閏問題を、学者の間の議論とみなして事実上関わらなかつた。この明治革命国家の原理上のダブルスタンダードや、原理へのルーズさは、日露戦争や大逆事件以降の政治的、社会的状況のなかで許されなくなつた。まず議会野党に、政府のダブルスタンダードをとらえて権力闘争を挑むきっかけを与えた。もともと原理にルーズだった官僚も、元老山県有朋と、議会議野党の圧力の下で態度を一変させ、宮中の長年の慣行をも無視し、「万世一系」という大日本帝国憲法の中軸的神話と辻褃を合わせるために吉野朝という名称で一本化した。

それにもかかわらず不思議なことに、問題の引き起こすきっかけとなつた喜田貞吉は文部省国定教科書の編纂から外されただけで、数年して京都帝国大学講師についたように処罰らしい処罰をうけず、帝大教授田中義成も「南北朝」を著作や講義で用いていた。こうした明治革命国家の振る舞いに、革命国家の原理問題に対するご都合主義的態度（「ダブルスタンダード」、「オポチュニズム」）を見て取れる。それは国家に深く内在し、その運用上必要とされた「あそび」だったのかもしれない。

明治革命国家は、「臣民」の歴史教育の面では、新たに創造された古代神話を植え付けることに勤めたが、その一方で、国家に内的に備わっていた「あそび」は、「原史料の収集と史料批判への「避難」を「官学アカデミズム」に可能にしたのだろう。さらには国家と、近代的学知としての歴史学との間に対抗関係が芽生え、潜伏し、ひいては厳しい緊張した関係が生まれる素地となつた。もつともこの「あそび」が、明治革命国家の全期間存続したか否かの問題は、別に検討する必要があるだろう。しかしこの分析においては、千葉報告が切り開いた政治史的接近法は、きわめて有効なものだった。

石野裕子報告「独立フィンランドにおける自国史の「創造」は、一人のフィンランドの中世史家ヤルマリ・ヤーツコラの著作を検討した、伝統的な分析スタイルを踏襲した報告である。ヤーツコラは、戦間期に、自国の古代・中世史について、それまで口承で詠われ、ようやく一九世紀三〇年代になって文字化された叙事詩「カレワラ」を核とした「特徴的な自国史像」の述作をもつて社会にひろく登場した。こうした書物を戦間期に公刊することによって、フィンランド人のアイデンティティを確認し、高めようとしたのであった。ところが彼が依拠した「大フィンランド」

思想が「フィンランド領を拡張するためにロシア・カレリアからエストニアまでを含む領土獲得を意図した膨脹論」だったために、第二次世界大戦後、彼の名声は消え去り、現在ではヤーツコラは「極端な歴史学者」というレッテルが貼られ、彼の業績も無視されているという。

現代のフィンランド国家は、もとはロシア革命のドサクサにまぎれて一九一八年に独立したという事情がある。それゆえ、フィンランドの歴史知は、当初から、きわめて強い政治的磁場の内に置かれていたはずである。ならば、フィンランドの歴史知の形成へのナチズムの影響や、それとの比較も検討してみるのも面白かったかもしれない。

ナショナル・アイデンティティーのために近代以前の神話が用いられたという点では、日本とも共通する。しかしながら、①カレワラが民間の口承神話であるのに対して、日本神話は、古代天皇家（の周辺）の側が、支配の正統化のために自覚的に編纂した神話であり、②カレワラは学者の著作で用いられたものであったのに対して、日本では、明治革命国家と不即不離の関係にあったこと、国民の統合や動員の要請と直接結び付いていたこと、などで大きく異なっていた。戦間期フィンランドの政府、国家とカレワラの相互関係の実態とは、どのようなものだったのか。聞き手（読み手）に多くの問いを誘う報告だった。

ここで我田引水の誇りを怖れず言えば、革命ロシアの究極の目的は、「民族的再生」や「民族的復興」や「民族的独立」だったのではなく、社会総体の全面的な変革であった。だがそのために利用できる「古典古代」が、ロシアには存在しなかった（「原始共產制」を持ち出すのは、一知半解か、野暮というものだ）。そもそも「明治維新」やフィンランドのように、依拠できるナショナルな古代Ⅱ中世神話もなかった。むしろそれを否定するところに、自らの正統性を見いだそうとした。そこで必要とされたのが、伝統的な神話の代替物であった。それは、近代哲学や社会知を利用して作りだされ、「普遍性」や「インスターナショナル」をとる新しいコスモロジーであった（スターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』）。しかしこの場では、そのコスモロジーに基づいて「ソヴイェト歴史学」が一九三〇年代に形成されたという事実を述べるにとどめ、その本格的な議論や叙述は別の機会に譲らなければならない。

藤波報告「ギリシア東方の歴史地理―オスマン正教徒の小アジア・カフカース表象」は、オスマン正教徒知識人の著作の分析を通じて二〇世紀初頭オスマン領内の歴史地理認識を解明し、その作業によって「ロシア革命前後の時代の歴史叙述」を分析するための新たな視座を提供するとい

う、野心的な報告である。一九世紀末から二〇世紀初めのオスマンの知識人が取り上げられたのは偶然ではない。ここでは言語的にも、宗派的にも、民族的にも、いわんや国境の点でも、跨境的な歴史地理知が支配的だったからだ。

かれらへの、言語、宗派、そしてなによりも地理的にも込み入った事象を腑分けしながら点検し、分析する。これによって、言語や宗派や民族の重層性や混在性が凝縮し、社会経済的、人的ネットワークからなる現実の空間がくつきりと浮かび上がってくる。報告者は、そうした実像に、聞き手（読み手）がまなざしをしかと向けるよう要請しているのだ。

藤波のそうした要請の背後には、①これまでしばしば、近代歴史学の発展が国民形成と不即不離の形で論じられてきたこと、②このことが民族の歴史の舞台を形作る特定の地理認識を伴い、それによって想定された時空間が公教育その他の媒体を通じて国民統合の促進の手段となること、への批判意識が働いている。それは、近代化と国民形成のさいにひろくみられた歴史叙述においてしばしば無意識に前提とされてしまう座標軸、そして均整のとれた認識枠組みとを、相対化するか、あるいは破壊しようとする意図として現れている。

藤波報告は、「近代知Ⅱ近代的認識」という、二〇世紀

も半ばになってようやく織り上げられた均整のとれたいわば反物を、細き繊維一本一本にまで解きほぐしてもつれさせてしまうのではないか、との恐怖心と不安を人に起させるほどまでに挑発的な問題提起を孕んでいるのだ。

だが藤波の究極の意図は、歴史思想、歴史意識、歴史叙述の伝統的な型を相対化し、達成された近代の「美しい均整のとれた抽象的構成体」の地平から、単に後戻りするところにあるのではなかった。執拗に相対化を重ね続け「抽象化」というヴェールを剥がすことによってはじめて見える現に生きた人々の織り成す社会経済的、人的なネットワークを掘り起こすこと、そしてそこに焦点を合わせることによって、眼前にひろがりゆく豊穡で多様な現実との間で、未来にむけて対話を重ねようとするところにあるのではなからうか。

とまれ比較史学史（的方法）は、決して単なる学説史の整理ではなく、歴史研究の本道の一部とすらいえるのであり、それがいかに豊かな可能性をもっていることの一端が、本シンポジウムで確認できた。

（本学文学部特任教授）